

奥さまと女乞食

小川未明

青空文庫

やさしい奥^{おく}さまがありました。あわれな人^{ひと}たちには、なぐさめてやり、また、貧^{ます}しい人^{ひと}たちには、めぐんでやりましたから、みんなから、尊^{そんけい}敬^{けい}されていました。

冬^{ふゆ}になると雪^{ゆき}が降^ふりました。そして、いままで、外^{そと}で働^{はたら}いていたものは、仕事^{しごと}をすることができなくなりました。家^{うち}にいてさえ、寒^{さむ}い日^ひがつづいたのであります。

「ああこんなような日^ひには、食^たべるものもなく、また、たく薪^{まき}もなく、困^{こま}っているものがあるにちがいない。それを思^{おも}うと、私^{わたし}たちはしあわせだといわなければなりません。」

奥^{おく}さまは、外^{そと}を見^みながら、こんなことを考^{かんが}えていられました。

すると、窓まどの下を旅人たびびとがわらじをはいて、歩いてゆきます。また、重い荷おもをそりにつけて、男おとこが、うなりながら引ひいてゆきます。つぎには、あわれな女乞食おんなこじきが、子供こどもをおぶつて、あちらからやつてきました。日ひごろから、やさしい奥さまが、窓まどをのぞいていられたので、頭あたまを低ひくく下さげて、恥はずかしそうに、「どうぞ、奥さま、なにかめぐんでやつてください。」と、願ねがいました。

女おんなの身一人みひとりでも、この季節きせつに食たべてゆくことは困こん難なんであろうのに、こうして、子供こどもがあつては、なおさら、困こまるにちがいないと、奥さまは深ふかく同情どうじょうせられました。女おんなのおぶっている子供こどもは、脊中せなかで、泣ないていました。

「どうして、そんなに、その子は泣くのか？」と、奥さまは、聞かれました。

すると、女乞食は、訴えるように、奥さまの顔を見上げて、
「この寒さに、かぜをひいたのでございます。」と答えた。

これを聞くと、奥さまは、自分の体に、悪寒を感じたような気がしました。かぜをひいているのに寒い風にあたつてはよくないだろう。そして、こんなにうす着では、ますます冷えるばかりだろう。しかし、この女には、どうすることもできない。

「まあ、それはかわいそうに……。」「と、奥さまは、同情されませんでした。なんとといって、なぐさめたらいいか、奥さまには、わからなかつたのでした。

奥さまは、内へはいって、もちや、お菓子や、また、紙に包んだ錢を持ってこられて、

「帰ったら、この子にやっってください。」といつて、女乞食に渡されました。

乞食は、目に涙をためて、幾たびも幾たびも頭を下げ、窓の下を去りました。

後で、独り、奥さまは、ぼんやりと、思われたのです。もし、

これが、うちの子であつたら、どうだろう、あのかわいい坊やが、かぜでもひいたのだつたら、どうだろう？ 私は、こうしていら

れはしない。私は、いてもたつてもいらはしない。私は、気が狂うばかりに、大騒ぎをするにちがいない。そして、あんなに

泣くのを、じつとして聞いていられないだろう……。。

「こうも、人間は、境遇によつて、心の持ち方がちがうものかしらん。」と、考えていられました。

このとき、隣の年とつた女房が、粉雪のちらちら風に舞う中を、前垂れを頭からかぶつて小走りにやつてきました。そして、窓の下のすぐ奥さまの目の下に立つて、小さな声で、

「奥さま、まことに、お気の毒ですけれど、晩に食べる米がないのです。どうか、一升ばかり、お貸しくださいませんか。」と、つばをのみのみ頼みました。

奥さまは、この一家は、子供がたくさんで、平常から困つてゐるのをよく知っていました。これまでも、こんなことをいつてき

たのは、たびたびです。そして、借りていった米をついに返しにきたことはなかった。奥さまは、また、貸してやったものは、与えるつもりでいましたから、催促は、もとより、持つてこなくとも、べつに気にも、とめていませんでした。しかし、女房が、こういつてくるときは、前に借りていったことは、すっかり、忘れてでもいるようなようすでありました。

「いま、ここへ持つてきますから、お持ちなさい。」と答えて、奥さまは、ふたたび奥へはいつて、自分で米をますに山盛り持つてこられました。

「まあ、こんなに、ありがとうぞんじます。」と、女房はいつて、かぶつていた前垂れをとつて、その中へ米をいれてもらい

ました。風かぜは、女房にようぼうの灰はい色いろがかつた髪かみの毛けを吹ふいています。
 「なかなか、寒さむうございませうが、お坊ぼつちやまは、どうもなさいませんですか。」と、女房にようぼうは、たずねました。

「ねえやに、おんぶして、いま、眠ねむっています。」と、奥おくさまは、笑わらつていいました。

「いい赤あかい帽子ぼうしを買かつて、おあげなすつて、たいへんに、おかわいらしゅうございませうこと。昨日きのうねえやさんに、おんぶして、前まえをお通とおりになりましたとき、にこにこしていらつしやいました。

ほんとうに、ご不自由ふじゆうがなくて、おしあわせでございませう。」と、女房にようぼうは、お世辞せじを残のこして帰かえつていきました。

それから、二、三日にちのち後のことであります。坊ぼつちやんは、赤あかい

ぼうし
帽子をかぶって、女中におぶわられて、雪晴れのした、日当たりに出で、雨滴のぴかぴか光り、落ちるのをおもしろがつて、きやつきやつと笑いながら見ていました。そのうちに、まるまるとした、かわいらしい手を出して、自分のかぶっている帽子をとつて、下のぬかるみの中に投げてしまいました。

なにか、ほかのことに気をとられて、うつかりしていた女中は、はつとして気づくと、奥さまの買ってきてくださった、坊ちゃんの新しい帽子が、ぬかるみの中に落ちて、だいなしになつていたので、

「まあまあ、お坊ちやま、たいへんじゃございませんか……。」
「
といって、あわてて拾い上げたけれど、どろがびったり、帽子に

ついでにしました。

女中じよちゆうは、さつそく、帰かえつて、このことを奥さまおくに告つげ、そして、水みずで、帽子ぼうしを洗あらつて、窓まどの外そとの日ひ当たりありに出だして、乾かわかしておいたのであります。

冬ふゆの天気てんきは、また、陰かげつて、雪ゆきとなりました。奥さまおくは、障しょう子の閉じまつた、へやの中なかで、熱心ねっしんに仕事しごとをしていられました。

そのとき、窓まどの外そとで、人ひとのけはいがして、

「あか、あか、坊ぼっちゃんちゃんのきれいな、あかいお帽子ぼうしだこと……。」

「いいお帽子ぼうしだこと。あたたかそうなお帽子ぼうしだこと……。」

こういつて、脊中せなかの子供こどもに、いつているのは、まさしく、こないだの女おんな乞食こじきでありました。奥さまおくは、乾かわかしてある帽子ぼうしを見

て、なにかいっているのだらうと思われました。しかし、そのときは、いそがしかつたので、奥さまは、だまつて、外の声を聞きながら、仕事をしてもらいました。

そのうちに、乞食は、いつてしまつたようです。しばらくしてから、奥さまは、帽子が乾いたらうかと窓の障子を開けられました。

しかし、赤い帽子が、ありませんでした。

「どこへいったらう……。」と、奥さまは、あたりをおさがしになつたけれども、影も形も見えなく、ただ、雪の上に、人の足跡が、新しい雪に消されて、うすく残っているばかりです。

「あの女乞食が、よもや、持っていていきはしまい。」と、つい、

あまりの不思議ふしぎさに、乞食こじきを疑うたうような心こころが起おこりました。

しかし、奥おくさまは、そのことをだれにも告つげずにだまつていられました。そして、坊ぼっちゃんに、新あたらしい、ちがった帽子ぼうしを買かつてくださいました。

おしやべりの隣となりの女に房ぼうは、ちがった帽子ぼうしを坊ぼっちゃんがかぶっているのを見みて、

「こんないいのを、また、買かつておもらいなさつたんですか。赤あかい帽子ぼうしは、どうなさいました！」と、たまげたような顔かおつきをしして、聞ききました。

「どろの中なかへ落おとしたから、あつちの人ひとへやつてしまったのね。」と、奥おくさまは、軽かるく笑わらつて答こたえられたのです。

「ああ、そういえば、昨日きのうでしたか、よくこの前まえを通りまとおす女おんな乞食こじきが、小さい子こに、赤あかい帽子ぼうしをかぶせていました。」と、女にょ

房うぼうは、さも、うなずくようにいいました。

奥さまおくは、これを聞きくと、やはり、自分じぶんが疑うたがったのは、ほんと

うであつたか？ それにしては、よくない女おんなだ。こちらが、あれほど、気きの毒どくに、思おもつたのに、その恩おんを讐あだで返かえすとは、あきれた人間にんげんだと、心こころの中なかで、憤いきどおられたのでした。

また、幾いく日にちか過すぎて、空そらも、だんだんと明あかるくなつて、冬ふゆも終おわりに近ちかづいた時じぶん分ぶんでした。奥さまおくは、窓まどから外そとを見ていまみすと、いつかの女乞食おんなこじきが、見みるもやつれたふうをして、前まえへきて、頭あたまを下さげました。そのようすを見ると、奥さまおくは、なにもかも忘わす

れて、感動かんどうされたのです。女乞食おんなこじきは、その日は、ただ一人ひとりで
 ありました。水みずにぬれた、両足りょうあしの指ゆびは、まつかに見みえます。
 「子供こどもは、見みえないが、どうしました？」と、奥さまおくは、たずね
 られました。

女乞食おんなこじきは、たちまち、両方りょうほうの目めいっぱいに、涙なみだをためて、

「あの子こは、なくなりました。いろいろ奥さまおくから、お情なさけをか
 けてくださいましたけれど、かぜがもとで、死しんでしまいました
 。」と、言葉ことばはふるえたのであります。

奥さまおくは、母親ははおやの脊中せなかに、ひいひいとうすい破やぶれた着物きものをき
 て、泣ないていたあわれな、子供こどもを目めに浮うかべました。なんで、帽ぼう
 子うしのことを、この気きの毒どくな人ひとに対たいして、とがめえようと思おもいまし

た。

ああ、何なに人びとが、つぎのような事じじつ実じつを知しらう。——脊せな中なかの、病び

よう気きの子こ供どもが、赤あかい帽ぼうし子しをほしがったので、あわれな母は親おやは、

あつもかねらかい集あつめかねた金かねで、町まちにまちちにちいちつちて粗そ末まつな赤あかい帽ぼうし子しをか買かつかつかて、それを

こども子こ供どもの頭あたまにかぶせてやりましました。おしやべりの女に房ようが、見みた

といううののは、それだつつたののです——

雪ゆきの上うえを明あかるかく照てららす、太たい陽ようは、すべてを知しつつていました。

そして、その子こが死しんで、うずめられたときに、その赤あかい帽ぼうし子しを

かぶつてゆきました。

日ひましにあたたかになりました。雪ゆきは、降ふらなくなつて、地ちに

積つもつたのも、ぐんぐんと消きえてゆきました。小こ鳥とりは、山やまから、

里さとの方ほうへと飛とんできました。そして、うす紅あかいろ色いろにふくらみかけたこずえにとまって、いい声こゑで、さえずりはじめました。

いつさいを平びようどう等どうに、公こうへい平へいに、太たい陽ようは、そのあたたかな光ひかで輝かがやかしたのです。このとき、こずえの下の雪したの中ゆきから、坊ぼつちやんの赤あかい帽子ぼうしが、いくらか色いろがさめて出でました。

「おや！」といって、奥おくさまも、女じよちゆう中ちゆうも、驚おどろきました。それは、乾かわかしている時じぶん分に、ねこか、なにかが落おとして、その上うえへ雪ゆきがかかったのです。

すべてがわかつて、奥おくさまは、かりそめにも、ひとをうたがった、自じぶん分の心こころを恥はずかしく、すまなく感かんじました。そして、あわれな母ははおや親おやの、やさしい心こころに対たいして、少すくなからず尊そんけい敬けいされたの

であります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「教育研究」

1930（昭和5）年1月

※表題は底本では、「奥《おく》さまと女乞食《おんなこじき》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：七草

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奥さまと女乞食

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>